
Shine days

月見里 九

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Shine days

【Nコード】

N4561V

【作者名】

月見里 九

【あらすじ】

神は太陽を隠してしまった。

人類の危機に追い討ちをかけるかのように魔物の出現。

いよいよ最後の運命が見えた時、一国の皇女が立ち上がる。

真か偽りかさだかではない新天地の存在を信じ、旅に出た彼女。

また、彼女の安否を確認するべく派遣された一人の囚人。

全く身分と価値観が異なる二人の旅に果たして世界を救うことができるのか。

エリザの旅立ち

今日も太陽は姿を現さなかった。

エリザは窓から星も見えない真っ暗な曇天の空を見上げていた。薄い、透き通るような白いドレスを着ている。フリルの無い実にシンプルな造りである。しかし、これはエリザのお気に入りだった。飾らずあまり目立たない。自分の性格と似ているからかもしれない。

この服を着るのも今日でしばらく袖を通すことは無いだろう。明日からは、この国一番を誇る鎧を纏い一の騎士として旅立たなくてはいけないのだ。

側に置いてあった卓上のグラスを手に取り口へと運んだ。窓の外を見れば、外に出れば往復するだけで日が暮れてしまいそうな広い平野のような庭にぎっしりと人が集まり、騒いでいる。

今まで一番の大観衆であった。

彼ら全員が自分のために集まってきてくれている。普段は一寸も動かない堅い門は、大きく八の字に開いていて人が頻繁に出入りしている。まるでこんな日が来るとは思わなかった。エリザは嬉しさと悲しさが混じった表情で目を細く微笑んだ。

しばらく外を眺めていると、コンコンと背後でドアを叩く音が聞こえた。客人か？咄嗟に何人かの見知ったお偉いさんを頭に浮かんだが、皆全員は外下の彼らに混じって宴会を楽しんでいるはずだ。すぐに頭から霧散した。

「・・・どうぞ」

開けられたドアから覗かせた人物を見てエリザは拍子抜けした。最も多く、この部屋を出入りしている人間だからこそ逆に、候補から除外していたのだ。誰が来てもいいようにと姿勢を正し、身構えていただけに思わずため息が出た。

「ノックをするから誰かと思ったわ。まったく・・・」

現れたのは自分の身の回りの世話を焼いてくれる従者のティアラだった。起床時から就寝時まで二十四時間付きっきりの彼女だ。改めてノックなど今更であった。

だが、いつもの様子とは違う。活気な、見ていてこちらまで明るくなるような天真爛漫の彼女とは、入ってから一言も、ましては俯いている今の様子から、全然離れていた。

エリザの綺麗な白銀の髪を真似して、最近になって伸ばし始めた長めの髪が顔に掛かって表情が視認しにくい。ただでさえ暗いのだほとんど見えなかった。

「どこか具合でも悪いのティアラ？」

「っ・・・皇女様！」

言葉を口にできないほど具合が悪いのか。心配になって近づこうと一步踏み出したところでバツと向こうからエリザの胸元へと飛びついてきた。エリザはティアラを受け止める形になる。

見れば彼女は泣いていた。ティアラのほうが背が低い。顔を上げれば必然的にエリザを見上げる。

自分が生まれてからおそらく十八年。誰より多く彼女と接してきたエリザでも、泣き顔なんて一度も見たことはなかった。

エリザの肩を掴んだティアラは絞り出すように言葉を、訴えるような口調で言う。

「私は・・・私は反対でございます・・・！」

何が反対なのか、内容は明白だった。しかし、それも今更である。エリザは言葉に詰まった。

「太陽石の光も届かないようなところ。皇女が自ら赴くなんて自殺行為極まりないでございますっ」

この暗闇が支配する世界で、太陽石という自ら光を発するエネルギーを持つ石は、人間が生きていくこの時代で必須のアイテムである。一個個体だけでは小さく、光の量も効力もやや乏しいが、集めて加工し大きく形を作れば人間が生活するだけの明るさを得ることは可能であった。

実際、エリザの部屋にも小さく、薄暗いがランタンのように今も灯し続けている。目に映るティアラの泣き顔を間近で見ても何を言おうか思案した後、結局出てきた言葉は彼女を慰める言葉でもなく、ただの自分の決意であった。

「母さんの願いであり、敵でもあるのよ。ティアラ」

口にしながら自分はなんて酷い人間なんだと責めた。亡き母の名前を出せば、これ以上彼女は何も言えなくなってしまうのは当たり前だ。そして、身内の敵と称して自身のいい言い訳に使

っているだけではないのかとも同時に感じてしまう。無意識に眉が歪んだ。

しかし、ティアラは口をつぐまなかった。尚も食い下がろうと身を乗り出す。

「ならば、ならばこのわが身ティアラも一緒にお供します。今までどこまでもぴたりとお側を離れませんでした。無論今回も——」

「・・・ティアラ」

「——魔物の胃の中であろうと、暗闇の彼方であろうと、地の果ての地獄であろうといつ何時もティアラは離れませんっ」

子供の我が儘を言って聞かないような、幼稚じみた発言である。だが、彼女の目は本気であった。声色からも必死さが伝わってくる。

エリザは心に響いた愛おしさと、そこまで慕ってくれる感謝の感情がたまらなくなり、思わずティアラを抱きしめてしまうところだった。だが、それはできない。寸前のところで自重する。

今、彼女の背中に手を回したら、自分の決心が揺らいでしまう。そんな気がしたからだ。

「それは駄目よティアラ。今更危険とは言わないけれど、すでに決まったことなの。それに——」

言葉を切る。次の言葉を一瞬躊躇ってしまう。

「魔力の無いあなたは足手まといになるわ」

それが最後の決め手となった。聞いたティアアラは口をつぐんでまた、俯いてしまう。沈黙が続いた。外から漏れてくる騒がしい祭りの声だけが薄暗い部屋の中に流れる。やがて、

「わかりました皇女様。このティアアラ、もう何も言いません」

顔を上げた彼女は笑顔だった。瞼に小さく涙の後が残っている。

ごめんなさい。彼女に心の中で謝罪を思いながら、エリザも笑ってティアアラを見下ろした。

「ねえティアアラ。私は十八、成人になったのよ？」

そう言って棚から小瓶を取り出す。この国の宝珠とも言われている高級なお酒であった。入れ物からしていかにも高価な代物だと伺える。

ティアアラはエリザのイタズラをやらかした愛らしい顔を見て小さくため息を吐いた。

「まだ未成年ですエリザ」

生真面目に指摘をする。エリザの誕生日は明日である。そして時を同じくして、彼女は旅立つことになるのだ。

いくら最後だからといえど分別を弁える。ティアアラの昔からの難所であったが、エリザは彼女の堅物な性格も好きであった。それを重々踏まえているエリザは左手の腕時計を見せて小さく舌を出した。

今回は私の勝ちよと言わんばかりに胸を張って言う。

「もう零時を回ったわ。ハッピーバースデイ私。まさか、明日早いでベツトに入りなさいなんてさすがのあなたでも言わないわよね？」

はあ。二度目のため息。

「成人になっても子供っぽさは変わらないのですね皇女様は。嫁ぎの日が心配です」

「余計なお世話よ」

口を尖らせながら、新しいグラスを手取る。ティアラのグラスに注いだ次に、自分のグラスも満たす。互いに目を合わせた後、ティアラがグラスを合わせてきた。

「エリザ皇女の婚期に」

「あのねー・・・」

半眼になってティアラを睨む。クスクスと口に手を当てておかしように笑っていた。いつものティアラである。これで彼女が満足したといえは確実に嘘になるのだろうか、それでもエリザは普段通りのティアラを見て自らも破顔した。

「では・・・」

仕切り直しの意味で確認しあう。長年共に過ごしてきた、友情とも肉親ともいえない、だが硬い確かな二人の絆がここにある。

「この国の未来に」

それを改めて確認しあうように、二人は互いにグラスを合わせた。
儂い太陽石の光が二人を包み込む。

##

それは恐らく今までの中で一番総動員の大合唱であった。国民が宮殿前の広場に集まり歌声を上げている。音痴の者、美声を持つ者、バラバラでお世辞にも美しいとは言いがたいかもしれないが、歌っている一人一人の表情は興奮と嬉しさが混じった笑顔であった。

歌っているのは古くから伝わるこの国の聖歌だ。大規模な戦闘が行われるとき、国に危機が迫っている時などによく使用される歌である。普通聖歌といえば、しみりとした心に響く、涙を誘うようなメロディーで構成されているのが一般的に認知されているが、この国では、士気を高めるために、緊迫した状況下ならなおさら。ということで、明るい、云えばアップテンポの曲で作られていた。

自然と皆が元気になる。そんな高揚感が含まれていた。国から依頼された有名な演奏者を集め、広場に流れる弦楽器と金楽器の音に包まれながら女性は歩いていった。

歌う大観衆の開いた真ん中の道を、胸を張って進む。光沢のある真紅の鎧に腰にぶら下げている宝剣、マントを風になびかせているその姿は正に騎士。女性とは、いや、つい昨日までこの国の皇女だった人間とは、到底思えない風格であった。

大陸の南に位置するここ、イクストヴェリア帝国では今、前代未聞の危機に直面している。

古代、同士の争いを絶え間なく続けてきた人間に怒りを覚えた世界の創造主の神は、太陽を人間から厚い雲で隠してしまったという。

以来、この世界には日光という光に照らされることがない。本当に神という存在があり、本当に怒り、太陽を隠したのか否かは今となっては誰も証明できないが、古くからの一冊の伝書によると確かにそう記されていた。

暗闇に支配されてしまったこの世界では植物が成長しない。それは作物を重要とする人間の生活には致命的なことであった。一度は世界人口の三分の一は飢えて死んだということも伝えられている。しかし、それだけではない。さらに人類の絶望は続いた。

魔物という、生態が異常に発達した化け物の存在が発見されたということだ。基本、他の動物を主食として生きているが人間を好物としているため人を襲い喰う。存在を確認した当初は、種類も少なくそれほど驚異とはならなかったが、何時の日かいきなりその数を増やし増殖していった。

さらに人口は減った。絶え間なく続く魔物襲来によって国も、町も村も瞬きの速さで滅びていく。いよいよ人類に最後の運命が見え始めた時、一つの集団があるとある大国へと訪れた。この国では見かけられない肌色に妙な存在感を持つ人達、どこかの村の部族か。はたまに遠く離れた国からの使者か。さては魔物の類いか。昔も今も、周りでは魔物がうようよと生息しているためよほどのことがない限り国の外へ出ることは滅多に無い。止む終えない用があるならば必ず、単身ではなく複数の人数で出ることが必要となった。それでも、危

険性は非常に高い。国々同士の交流はほぼ皆無といっているだろう。よって自国に異色の人間が入ってくれば警戒するのは当たり前だった。

兵士数十人の槍に囲まれながら訪れた集団はこう叫んだ。

「我らは神より与えられた力を持つ魔道師。この神の力で魔物を退治して見せよう」

最初は信じられなかった。それをこの場で披露しろと命令しても、魔物にしか使わないと拒否するのだ。

呆れたように捕らえられ、牢獄へと入れられてしまった。良ければ終身刑、悪くて処刑。しかし、彼らは十日と経たなくして外へと釈放されることとなる。魔物が国に進撃を繰り返して止まないからだ。自国の兵では到底太刀打ちできない。甚大な被害を伴った王は、彼らを自ら王室へと呼び、魔物の撃退に協力してくれと懇願した。異色のしかも、誰かもわからない人間どもに国の存続の危機を任せるなんて屈辱に齒を噛み締めるところだが、そうも言っていられるような状況ではなくなってしまうたのだ。彼らに白羽の矢が立った。

彼らの活躍は誰もが開いた口が塞がらない。それほどの驚きをあたえるほどに凄く、見事なものだった。自ら魔法と名称される不思議な光を持つ力により魔物を死滅していく。

あれほどにまで武器を持った兵士が何十人も囲み、数日の死闘を続けなくては勝負にならないのに彼らは数時間の戦いで、一人の犠牲者もなくまるでゴミを掃除をすかのような、意図も簡単に倒してしまった。

国の英雄である彼らに王は、強く自国に留まることを願った。彼ら

を奉り、祝杯は三日三晩行われたという。結局了承した彼らに市民権を与え、王都である貴族の土地に住まわせるなどできるだけの優遇でもてなした。彼らがどこから来て、どのようにしてここまで来たのか。誰もが知りたく聞きたいものだが、知ることができたものはいない。彼らは堅く口を開かなかった。

やがて、少しずつだが着実に彼らはこの国に浸透していった。正体が曖昧な人物であるが国の英雄である。歓迎しないわけではなかった。

今でもその人数こそ少ないが魔道師の、彼らの血を受け継ぐものはいらる。魔物が増大し、より狂暴になった今、ますます魔道師の力は重宝されており、また、現在のイクストヴェリア帝国の兵士の約三割は魔道師の人間であった。

魔物の襲来はあれからも幾度も続いた。昔もこれからも永遠に、この世界にいる限り続くであろう。しかし、こちらが優勢であった魔物に対して近年、本能のままに一体、多くて五体ほどしか一度に襲い掛かってこなかった魔物たちは知能を持ち、自分達のリーダー格を決め、集団で襲うようになってくるものが多くなっていった。

この世界は混乱した。今はいくつもの国が大陸に存在しているが誰も共通して魔物を排除できない。昔と違い、統制のとれた魔物は、数で勝負をしてきた人間にとってまた自分達が劣勢だった頃の振り出しに戻った形になったのだ。国々はなんとか魔物に立ち向かうが如何せん状況は芳しくない。そういった荒波を南の大国イクストヴェリア帝国にももちろんのこと、のまれてしまっているのだ。

北の国ユニオスが魔物の手に堕ちたと報告が入ったのは約一ヶ月前のことだ。軍事大国で大陸中に名を轟かせていたユニオスは現在の波乱な世の中でもっとも安全な国であると聞いたのも記憶に新しい。

しかし、堕ちてしまった。これは人類にとって戦意を限りなく落とすことに充分なことであった。

ユニオスが駄目なら私達は終わりだ。誰もがそう思ってしまったのだ。今回の魔物の集団は一国に終わらず、何国も滅ぼし、人間を喰らっているらしい。人類全体を滅ぼすつもりなのかかもしれない。幸い、イクストヴェリア帝国には魔物の進路上、ここまで来るのに早く見積もって約半年と少しかかることが判明した。

周りの険しい山脈に囲まれているため、人間とは体力も、速度も数倍上回っている魔物でもそれだけの時間を要するのだ。だがしかし、彼らはいずれやってくる。

崖っぷちに立たされたイクストヴェリア帝国国王はそこで最大の奇賭けに出たのだった。

歩いていると自分の名前を呼んでいる子供の声が耳に入ってくる。エリザは足を止めることはなく、首だけを回した。右の少し前方、父親に肩車されながらこちらに手を振っている少女が目に入った。少女の笑顔を見て強張らせていた顔を少しだけ緩める。自分も手を振ると少女は嬉しそうにはしゃいだ。少女だけではない。周りの誰も彼もがこちらを見、喝采を上げている。すでに聖歌の合唱は終わったが、一向に静まる気配はない。

振り返れば、自分とは違う色の青い甲冑をつけた二百もの兵士たちが自分に続いて行進していた。どれも歴戦のある実に勇猛かつ、屈強な人間たちだ。魔道師である力を逸材とまで言われた母の血を受け継いでいなければ彼らの足元にも及ばなかったであろう。このようにして、彼らを率いて堂々と民衆の前を歩くこともなかった。

「皇女様、もうすぐで門でございます」

追いついてきた副官が耳元で囁く。いくら力があるといえどエリザは王宮育ちである。軍の指揮がまだ初心者なエリザに変わって彼が隊を纏めるのだ。

だが未だに皇女と呼ばれている。まるで自分は国民に良い印章を与えるただけに祭り上げられ表面上だけの隊長みたいではないか。エリザは側の副官をキッと睨む。

「皇女ではない。隊長と呼べ」

「す、すいません隊長」

謝る彼を彼女は見向きもせず、くるっと後ろへ向くと、腰の剣を鞘から抜いた。太陽石の光に研かれた刀身が反射する。

剣を持つ右手を高く持ち上げると、側にいた副官、つづいて二百の兵士が一斉に剣を抜く。さっきまであればど騒がしかった広場が、彼女らを見て水を打ったように静まった。ここにいる民衆全員がエリザに注目する。

彼女は何十万もの視線をこの身で受け取ると、口を開いた。

「我、エリザ・サーベルト・イクストヴェリアはこの身を一心にかけて必ずこの世界を新天地へと導いてみせる。その時までしばし待て」

短い言葉であったが、言葉には固い意志があった。広場中に反響する。

またもや大歓声。激励の言葉があちらこちらから飛んでくる。

エリザは国民の声を背に踵を返すとマントをなびかせて門へ足に向けた。後ろからは隊列を乱さない部下が多く着いてくる。彼らの命はすべて自分が握っているのだ。いや、この作戦が成功しなくては、自分の国を失うことになる。国民全員の命を握っているといつていい。生唾を飲む。門を出ると、先ほどの明るさは嘘のように漆黒の暗闇が前方を覆っていた。

恐怖。もちろんある。今まで国の外はおろか、城の敷地内から一歩も出たことがなかった自分である。いくら半月間、野演訓練や兵士たちに混じって体を鍛えたものの、只でさえ毎日訓練を欠かさない一の兵士でも国外の暗闇を目の前に足が震えるのだ。エリザにとってこれは超過酷を強いることになるだろう。

隣から、魔力の流れを感じた。目を向ければ先ほどの副官の彼が魔法を使っている。といっても、魔力を体から出し、自分の鎧に流すだけなのだが。しかし、どうだろう。彼が魔力を放出すると同時に身につけている鎧がたちまち光を帯びていく。まるで、一つの光の玉みたいであった。

エリザも同様、直ぐに魔力を放出する。真紅の鎧が光だした。周りの視界が少し改善される。

鎧は太陽石を加工した物である。太陽石は非常に硬く、耐久性に優れている。また、軽く動きやすい。元々の特徴として光を発するがこれは人の魔力を与えれば光るものであり与えなければだんだん光を失うが、逆に永遠に与え続ければその分光続けていくのだ。広場の光も同様、何十人の魔道師が交代しながら魔力を与え続けていたのであった。二百人を交代制で分けながら光を出していく。人の魔

力は無限ではない。体力同じく、消費すれば疲れてしまう。だから、今回は半分の百人が魔力を鎧に注ぎ込む。もう半分は彼らについていくのだ。

光を帯びた二百もの勇者たちの背が小さくなっていく。

彼らに命運を賭けたイクストヴェリア帝国国王と国民は半分の期待と拭いきれない、もう半分の不安を胸に抱えながら彼らを見送った。

非日常な日常（前書き）

はじめましてこんにちは。

前章はどうでしたか？まだ、序章でしかありませんがこれから地道に更新していくので、ちらほら立ち寄ってくれるとありがたいです。

非日常な日常

目を開けて。

「挨拶はおはようございます。次の挨拶はこんにちは、夜はこんばんは。最後に就寝時はおやすみなさい。自分はアレン、今年で十八の純粋なチェリーボーイ。趣味は読書に特技は人間観察。体調は好調。よし、完璧に俺は生きている」

夢から現実へと覚醒して、目を覚ました瞬間、呪文のように言葉を唱え始めた。三者から見れば驚き、不気味がられ、大いに引かれたことだろう。しかし、この場には人はおろか、物音一つしない。アレンの残響がこの空間に響いているだけだ。

重たい眼を擦りながら腰を上げる。周りは暗く、明かり一つ見当たらない。どこに地面かどこまでが壁なのか全く見えなかった。だが、アレンは長年ここに居座り続けただけに、この場所はすでに熟知している。飛び降りるようにして簡易ベットから地面に足をつけた。

「イタッ」

足に力を入れた瞬間、腰に痛みが走る。思わず声が出た。

原因はわかっている。今まで横になっていた簡易ベットが悪いのだ。固い、綿の一つも入っていないマットのようなベットに一晚睡眠を取ると必ず毎朝、腰を痛めてしまうのだ。

忌々しく思い一蹴り入りたいところだが飛び降りただけで軋み、今にも壊れそうなため安易に攻撃できない。チッ。イライラと舌を鳴らした。

見えないはずなのにまるで全く見えているかのように、堂々と部屋内に進む。触って、目の前のドアがあることを確認すると、突起物を探して捻った。ガツチャ。そして押し開く。

外に出たとしても依然として明かりはなかった。そればかりかまるで洞窟のように暗闇が広がっている。しかしアレンは迷わず足を運ぶ。ペタペタと裸足の音が遠くまで響いた。

「みんな、もう起きたのか」

通り過ぎた横を確認すると、ドアが外側に聞いているのを何枚か見えた。中は無人である。いつもなら、この通路を歩いていれば、顔見知りの何人かに必ず会うはずなのだが今日はまったくの無人。自分の独り言が反響するほど、静かだ。

寝過ごしたか。時計の無い毎日では、自分の体内時計を信じて生活するしかない。そもそもあまり、時計を気にしない場所ではあるが朝、昼、夜の食事の時間だけは決まっている。これを逃すと問答無用で食べ損なうことになるのだ。アレンはそれだけは避けたかった。自然と早足になる。

ようやく到着した眼前の扉に、思わず安堵のため息をこぼす。扉からは明るい光がこぼれ、中からは賑わいの声が聞こえてくる。どうやら、間に合ったようだ。

明らかに朝からの見てきた扉より二周りも大きなこの扉は、ここから続く部屋もそれなりに大きな広さであると想像がついた。

両開きの構造であるためドアノブは無い。アレンは重たい扉をゆっ

くり押し開けた。

部屋からの眩しさに思わず目を完全に瞑ってしまった。何回も体験しているが、これだけは一向になれる気配がない。

笑い声と楽しそうな話し声の中に、ホークとナイフの金属音、皿を重ねる音に咀嚼している音、耳に聞こえる魅惑の音が目を明るさに懸命に慣れようとしている中でも、アレンのお腹を正直にぐるぐるるっと獣の唸り声を鳴らせた。

目は半分閉じたままだが、大分明るさに慣れたアレンはまず、中央の食事がズラッと並び、集まっている場所へと歩を進めた。いい匂いが鼻腔をくすぐり、舌を打つ。

ここは、食堂広場である。ここにいる人間たちの唯一の戯れる空間。孤独が長い時間続く自分たちにとって、食事の時にしか触れ合えない他人との交流はとっても大事なことである。そのため、この時間帯は必ずと言っていいほど賑わいを見せる。

アレンは配膳に並ぶ多様な食事から、好きなものを選びつつ、周りの賑やかな声に思わず頬を緩めた。

この時間は自分にとって一番好きである。外へ出ることが叶わない自分たち、普通の暮らしが強制的に行えない自分たちにとってこれは、この時間帯だけは、自分がしっかり生きているのだな実感できる場所であった。

本当に心地がいい。アレンは心からそう思った。

「なーに、にやにやしてんだ？アレン」

「おわっ！」

一通り、自分の皿に、選んだ食事を盛り付けると、不意に肩を強く叩かれる。違うことを考えていただけに驚き、危うく手に持っていた皿を落とすところだった。

慌てるアレンに声をかけてきた男は愉快そうに笑う。

「・・・サイ、人を呼ぶときにそんなに強く肩を叩く必要無いだろう。力強いんだから、痛いぞ」

半眼になってアレンは目の前の男を睨む。男、サイは「ワルイワルイ」全然申し訳なさそうなに軽く謝ると、今度はアレンを引き付けて首に腕を回してきた。ツンツン頭が顔にチクチク刺さる。痒い・・・。

「それよか、聞いたぜえ？先日、クリスを警備兵のクソ野郎から庇ったそうじゃないか。ややさすが、見直した！」

耳元で、馬鹿でかい声で唾を飛ばしながら機嫌が良さそうに叫んでくる。

アレンは、鬱陶しそうに距離を取ろうとサイの体を押すが自分より一回り巨大な彼はビクとも動かない。そればかりか、尚も顔を近づけて迫ってくる。

「俺はさあ、お前のことを根暗で地味な、男女のいけくそ悪い人間だと思っていたんだよ。ああ、こいつとは話は会わねえ。初対面からそう確信していたね」

悪かったな、根暗で。アレンは無意識に自分の前髪を触った。

ここに来てから一度たりとも髪にハサミを入れたことがない。特に理由は無いが、なんとなく面倒で今まで切らなかったのだ。おかげで年代の割りに幼く見えるアレンの顔は、時折女性と間違われることがあった。切らなかった長い黒髪がさらに童顔のアレンの顔に拍車をかけているのだ。

さらに前髪は目元を覆っている。根暗や、地味だと思われても仕方がなかった。

「でもさ、今回の武勇伝を聞いて、俺はお前に対しての見方が百八十度変わったよ！」

「そ、そうか、ありがとう。うわあっ！」

ズルズルツ、首に腕を回されたまま引きずられるようにして連れられる。食堂広場には、四つイスに一つのテーブルがセットで満遍なく配置されている。食事にやってきた人達は、自分たちのお気に入り席を我先にと座っていくが大抵、自分が好む席は共通して他人にも人気ある席というものだ。

ここでいえば中央の、食事の配膳が並んでいる近くの、入り口から最も遠いテーブルだ。

この食堂はバイキング形式であるため、おかわりは自由である。近ければ近いほどすばやく、好きなだけ自分の皿に盛り付けることができるのだ。

いつも、アレンが訪れるときは『特等席』は必ず埋まっており、座れたことは一度も無かった。

だが、どうだろうか、サジに連れてこられた席はまさに『特等席』である場所だった。四つの席のうち、二つはすでに先客がいる。こちらに手を降っている。

一つの空席はサジの分として、残り一つの空席はまさか、自分のためなのか。アレンは目を見開いて驚いた。

「まあ、今回は我が英雄様に感謝と勇気ある行動を称えたちよとしたサプライズさ。確か、アレンは『特等席』は始めてだったのか？」

開いた口が塞がらないとはこのことだ。サジの問いにも「ああ」と曖昧に答えるだけだった。

勿論、これは嬉しさからの感情であつた。別に、『特等席』に座れる喜びからではない。自分の仲間が、自分のために取っていてくれたことに歓喜あまっているのだ。

「アレン、ぼーっと突っ立ってないで座ったら？早くしないと朝食の時間が終わってしまうよ？せっかくアレンのために確保した席なのに、堪能せずに終わったらくたびれ損だよ」

『特等席』に座っている短い髪の女性がアレンに呼び掛ける。アレンにとって一番長い付き合いをしている腐れ縁のニーナだった。少し珍しい、赤色の髪が特徴的である。

「この席の特権おかわりの優遇はもうすでに時間が経っちゃっているからあまり意味はないけどな」

肩を押してアレンを座らせるサジは苦笑を浮かべる。

さっきまで鬱陶しいと思っていたサジがこんなにもいい奴に見える。

「皆、ありがとう」

照れくさく、俯いている状態でしか感謝の言葉を言えなかったが、十分に伝わったようで、アレンの様子を見て二人は満足そうに笑った。

「あ、あのっ！」

すると、勇気を振り絞ってやっと出したような小さな、か細い女の子の声が聞こえた。

ニーナの隣、今までタイミングを窺っては、口をつぐんでの繰り返しだった女性だ。アレンが目を向けると顔をボンッとトマトのように真っ赤に染めてしまった。

「あ、ああああ、ありがとう、ごさいましたー！」

ゴン。『あ』が妙に多いお礼を噛みながら述べたのはいいが、頭を下げた勢いにテーブルに額をぶつけてしまう。

ドジっ子の鑑のような行動である。あまりのベタさに一同哑然と固まってしまった。

「痛い・・・はっ！すいませんっ。わたし、い、いえわたくし、先日一命を助けていただきましたクリスマスですっ！」

別に初対面な訳でもないのに、焦りすぎだろ。アレンは、小さく笑う。

クリスは極度の人見知りだ。会話が成立するところを見たことがあ

るのは親友のニーナと話している時ぐらいであろう。女性より男性の方が圧倒的に数を上回っているこの場所で、彼女はいつも話しかけられると、石像のように固まり、声を発するどころか、息をするのも忘れてしまうほど緊張に支配されてしまうのだ。

アレンは彼女のキョドリ具合を解すつもりで、勤めて穏やかな口調で声を出す。

「別にあの時はたまたま自分が通りかかっただけで、運がよかっただけだよ。それにしても、本当に何もされなくてよかった」

先日のこと、就寝時間前にちょうど、トイレへ赴こうと相変わらずの暗闇の通路を歩いていると、とくに鍵が閉まっているはずの食堂広場内からクリスの叫び声が聞こえてきたのに、アレンは足を止めた。

訝しげにドアを開けてみれば、自分たちを監視、閉じこめている警備兵の男がクリスの身ぐるみを剥がそうと馬乗りになっているではないか。涙を流しながら助けを乞う彼女に、アレンは反射的に体を動かしした。彼女を助けようか、警備兵を傷つけてどのようなことになるのか、そんなことは頭の片鱗にさえ過らなかった。

へらへら笑っている警備兵の顔面を蹴っ飛ばして失神させた後に気づいたことは警備兵の体から酒の臭いが強烈に臭ったということだ。沸騰した頭が冷め始めた頃、目を覚ましたときには彼の記憶が飛んでいることを切に願った。

昨日はその後、二人共早くこの場から去るために急いでいて、しっかりとしたお礼をクリスは言えなかったのだ。

「そ、それでもっ、うれしかった・・・」

語尾が絞れていく。顔の赤みは濃く変わらず、顔は下を向いているが目線だけはしっかりとアレンを見ている。不器用ながらもその瞳からは感謝の念が伝わってきた。

「そ、そうか。それはよかった」

そんな彼女を見ていると、こちらまで照れくさくなってしまう。なんか今日は照れてばかりだな。頬を掻きながらアレンはそんなことを思った。

何やら嫌な視線を感じて横を見ると、ニーナとサジが顎に手を置いて、気持ち悪いほどニヤニヤと口角を上げてこちらを見ている。「なんだよ」睨みながら聞けば、「別にー、なんかいい感じだんって思ってさー」妙に意味ありげな言い方でそっぽを向いた。二人は少し、からかい癖が強い。

クリスは案の定極度の照れ屋であるし、アレンは素直な方ではない。何かしらと理由をつけては二人をからかい楽しんでいるのだ。

嫌な流れだな……。またアレンとクリスの二人を恋仲にしようとニーナが行動しを移し、楽しもうと企んでいるのではないかと過剰に察したアレンは話題を変えよう口を開いた。前にも彼女の働きで何度も嫌な思いをしている。

別に自分は、クリスのことが嫌いではないが恋人になりたい願望を持つまでには至っていない。普通の友達、仲間であると思っているのだ。彼女だってきつとそう思っているだろう。クリスを庇うためにも先手を打った。

「そういえば、三人は今日の朝刊をもう読んだか? 『エリザ隊』の近況が知りたいんだが……」

「うん？ ああ、読んだぜ。今は確か・・・おいつ。そこの朝刊読んだんならこっちに貸してくれ」

サジが他のテーブルの人達に首を回して声をかける。ニーナは話を逸らされたことにより膨れっ面になっているが、思いのほかサジが乗ってきてくれたようだ。

「はいよ」渡された新聞を手取る。何も無いここでは唯一の娯楽といえば朝の新聞一部ぐらいである。特に最近では興味深い記事『エリザ隊』の事が一面に載っている。皆が読みたがり、中々目を通せない人も多い。だが、それでも、アレンにとって毎朝新聞を読むことは習慣であり、今まで一度も新聞を手に取りなかったことは無い。どんな時でも必ず、朝食時には目を通すのだ。

「時に目立ったことは書いてないぜ？——魔物と数体遭遇するものの、勇敢な兵士たちが果敢に戦い、またエリザ皇女の武勇の功で我が『エリザ隊』は何の支障も無いなんてどこぞの將軍様でもありえない話だな」

鼻を鳴らして座っているイスに腰を深く沈めるサジ、口ぶりからすると明らかに新聞記事を信じていなくまた、『エリザ隊』を良く思っていない。

目の前の朝食に手を伸ばしながらアレンも半分は彼と同意見だった。魔物は恐ろしく狂暴だ。いくら精鋭の魔道師でも視界が不自由な暗闇の中で魔物と戦い、損害がなかったなんていくらなんでもありえない。少なからずこの記事は、真実を全て明らかにしているとは思えなかった。

だが突然、ニーナは強くテーブルを叩くと、皆の注目を集めた。

「なに言っているのよ。エリザ皇女の美貌だけが売りのメス豚はまだしも、『エリザ隊』にはこの国一番の剣術使いの副官のクリホオス将軍がいるわ!」

目をキラキラと輝かせ、頬を微かに染めている彼女はまさに、恋する乙女の顔だった。

「えっ」普段の表情から一転、ニーナの上気している顔に、クリス以外の二人は一斉に顔をひきつらせる。

「ああっ! まるで舞台上で踊っているかのように優雅で華麗なあの剣さばきっ。剣を振るう時の流れるような輝かしい黄金の髪! まさにっ、そうまさにあれこそが国の英雄の名に相応しいお方なのよお! 将軍! クリホオス将軍っ!」

まるで人が変わったかのように、空中を見上げ自分の世界へ入って叫んでいる。きっと彼女の目には今も名を口に出している将軍の姿が見えているのだろう。

しかし、この国、イクスヴェリア帝国の皇女であるところのエリザ姫には絶対に他人には聞かせられないほどの言い方だ。

ニーナってここまで感情移入する人だったか? 長年知っているアレンでも見たことがない顔であった。

一方、アレンとサジとは対照的に、クリスは平然としている。また始まったとばかりに苦笑いをしながら彼女を見ていた。この姿のニーナを何度か見ているのかもしれない。

「ニーナってクリホオス将軍のことが好きだったんだ」

今もオペラのように立ち上がって胸焼けしそうなぐらいあまあまに彼を褒め称えているニーナを見ながら呟く。

「らしいな。あんな人間のどこがいいんだか・・・」

アレンの声に首を降りながら応えるサジ。

すると、台詞がしっかりと耳に届いていたらしいニーナは目にも止まらない速さでサジに詰め寄った。彼女のものすごい剣幕の横顔にアレンはイスを引きながら後ずさってしまう。

「あのねえ、クリホオス将軍様は私達が監禁されているここ、アイセン留置所の廃止運動を積極的に活動してきた人なのよ？中々手間取って、成功する前に『エリザ隊』への入隊が命じられてしまったけれど、彼は私個人に限らず、あなたにとっても英雄的存在だと認識してもいいはずだけど？」

確かに、彼クリホオス将軍はこの食堂広場にいる全員が今いる場所、アイセン留置所と呼ばれる、犯罪の疑いがかけられている人間が監禁されてしまう場所の廃止運動に強く賛成をし、推進してきた人だ。勿論のことながら、アレンも尊敬する人物であるし、また、廃止は実現可能にはならなかったが彼の勇気ある行動には大いなる感謝を持っている。

しかし、いくらなんでもニーナの反応は過剰すぎる。サジはどうしたら良いのかわからず困った顔をしていた。

「お、俺だって将軍は敬意に値する人間だって思っているぜ。あの

人のおかげで少なくとも助かったところもあるしな。でも――」

そこでサジは表情を曇らせる。アレンには彼が言いたいとしている言葉の続きがわかった。わかってしまった。

「なによ」

二人の顔を見てニーナが怪訝な顔をする。サジは言おうか言わまいか言葉を渋っている様子だ。

数年前から始まったクリホオス將軍の度重なる留置所の廃止運動。その内容は主に国民への演説や、署名を集めるための運動だった。その昔、演説の内容が新聞の記事へ捉えられたときアレンが拝見した感想は、あまり良くは無い思いだった。そして同時に、アレンだけではないこの場に在るほとんどの人間がある疑問点に気がついた。まだ迷っているサジにとうとう痺れを切らした彼女は今度はアレンを睨む。矛先がこちらに飛んできた。

うっ、なんで。

できれば口にしたいくは無い。

そう思ったところで前から思わぬ助け船が出された。

「ニーナ、私達には市民権が無いわ。たとえクリホオス將軍が運動を成功させたとしても、解放された私達は住むべきところがなく、路頭に迷ってしまうはめになる。彼の運動が上手くいかなかった理由としてもっとも大きい訳は市民権の問題だったのよ」

先程、あれほど言葉を囁んでいた人と同一とは思えないほど流暢に

しゃべるクリス。相変わらずニーナへの会話と他の人の会話とのギャップが激しい。

ニーナは彼女の正論に、うっと逆に今度は自分が言葉に詰まった

そう、アイセン留置所に収監されているアレンを含む全員は、イクスヴェリア帝国に住むための市民権をすでに剥奪してしまっている。一回失った権限を再び、回復させることは非常に困難を極めるのだ。

アイセン留置所は犯罪者を収監する監獄とはまったく別の施設である。監獄へと連れて行かれる犯罪者の彼らに対して、アイセン留置所へ連れて行かれる人間は犯罪の疑惑がかけられている彼らの処分が下るまでの一時的処置としてこの場所に収監されているのだ。

しかし、アイセン留置所にいる人間たちのほとんどは、未だ、処分が下ることは無い。今も、いやひよっとしたらこのまま死ぬまで永遠に、何の処分もなしに、命が尽きるまで収監し続けなくてはいいかないかもしれない。

何故彼らに処分は下らないのか。理由は簡単、彼らには何の事件にも関わりは無く、まったくの無関係な人だからである。見に覚えの無い罪で疑いをかけられたものの、犯罪者にしたてあげられた者、イクスヴェリア帝国にとって隠さなければいけない人間。理由は個人様々であるが、誰もが人に騙され、強制的に収監された人間たちである。

彼らに何の罪も無い。そもそも、罪の無い人間であるからこそ無論、事件の決定的な証拠は出てこない。証拠も無ければ、不用意に処分を下すことはできないのだ。

そんな理不尽かつ、人権を無視した行いで、彼らは外へ出ることも

叶わず、普通に生活するかもできない、地獄のような留置所で、あるはずのない証拠を待ち続けなくてはいけなかった。

「あーっ、一回でもいいから太陽石な光に包まれた部屋で生活したいな。アレン、お前まだ目を覚ましたときの自己紹介やっているんだろう？」

アレンの食器からひょいっとウインナーを取ると、サジは口に入れた。しゃべることに専念していたアレンはさっきから食が進んでいない。「あっ！」短く悲鳴を上げた。

「そうだよ。あれを毎回しないと自分が起きているのか、意識があるのか、あの暗闇じゃあまったくわからないからな。もうすでに習慣化している」

アレンは眠りから覚めると同時に、毎回のように自分の名前からあいさつ、趣味特技までの思い付く限りの自己紹介を言葉にする。

アイセン留置所から与えられた個人の部屋は狭く、そこにはトイレと小さなベットしか整備されていない。部屋内は暗闇に包まれている。長く真っ暗な部屋にいと、自分が寝ているのか、目を開けているのか、はたまた自分は生きていれのかさえわからなくなってしまう。

自己紹介を声にすることでアレンは今日も生きていると実感するのだ。唯一光を見ることができる場所は食堂広場のここだけだ。

アレンほどではないがサジも長く留置所にいる。しばらく外には出たことが無かった。

「さらに、魔物の侵略が近いと来ている。いやはや、本当に俺たち

はどうなるのかねえ」

「魔物の侵略を阻止するために、『エリザ隊』が新たな新天地への開拓へと旅立ったのでしよう」

今度はニーナが食器から唐揚げを取っていった。そのままぐもぐと食べてしまう。

『エリザ隊』。この国の王の娘、エリザ皇女と副官クリホオス將軍率いる選り抜かれた精鋭の兵士たち二百人のイクスヴェリア最強の遠征隊である。

魔物の侵略がイクスヴェリア帝国に迫っている今、真っ向から勝負をしたところで今の人間には勝ち目は無い。それは魔物により侵略されてしまった周辺国がその身を持って伝えてくれた。

勝てないのなら逃げる。王である彼は、ある決断をした。

昔より、幻として伝えられたこの世界とは異なる、もう一つの世界。遙か西、険しい山脈を抜けるとそこには太陽の光が存在する。いわば今の人類にとって楽園の世界が広がっているという。童話にされている有名な話であるが、その真偽は定かでない。寧ろ、笑い飛ばされてしまうほど夢物語のような話だ。

誰も、信じるかは別として、わざわざ身を挺してまで探す者などいなかった。

しかし、イクスヴェリア帝国国王は土壇場のこの時、『エリザ隊』という急遽国一番を誇る兵士を編成し、我が愛する娘を頭に立てる事で国民の支持を得、魔物から逃げるため新天地への発見という確率の低い、正に苦肉の策に出たのだ。

だが、誰も国王が血迷ったなど思う者はいなかった。最強な軍事力を持つユニオスもが魔物へと堕ちたのだ。すでに武力では魔物になわない、ならば魔物のいない新たな世界へと逃げるしかないのだ。

「し、しかし・・・もし新天地が発見されたとしても・・・市民権の無い私達は一体どうなるのでしょうか」

クリスの言葉で一同静まる。

丁寧にお礼を言ってから彼女は一番近くにあった野菜の炒め物を一口食べた。

「おい、お前ら、さっきからどさくさに紛れて俺の食べ物つまんでんじゃねえよ」

「そうね、市民権の無い私達にはもしかしたら新天地が発見されたとしても招待されたかもしれないわ。いえ、きっと招待されないだろうね・・・あれ？」

しゃべりながらもアレンの食事の手を伸ばそうとしたところでその手は空を切った。見れば皿を持ってニーナの手から避けている。そのまま掻き込むようにして、食べられる前に胃袋の中に入れた。

『エリザ隊』がたとえ新天地への道を開拓したところで、市民権の無いアイセン留置所には未来は無い。魔物の胃袋で生涯を終えるか、人の手によって殺されるか、どちらかだ。

この場にいた全員が何も言わずとも察していた。自分たちはどの道死ぬ運命にある。だが、彼らの顔には少しも暗い影は無かった。今、この時も食堂広場は自分たちのささやかな人との交流を大事に

精一杯堪能している。

しかし、彼らの笑顔は、短い甲高い音で強制に終了を迎えてしまう。
カンカンカン。

フライパンを叩いているような簡素なこの音は、食事終了の報せである。食べ足りない人でも、どんなに話し足りない人でも、必ずあの暗い、孤独な自分の部屋へと戻らなくてはいけないのだ。

ノロノロと周りが腰を上げ、両開きの扉へと向かう。アレンもまだ十分に満腹感は満たされていないがしょうがない。皿を片づけて、歩いている皆の肩に並んだ。

「おい、アレン見ろ。王宮の正規軍だ」

耳元でサジが囁く。

正規軍？目線を辿ると、今しがた扉を開けてやってきた青い鎧を着けている男が数人立っていた。

普通、王宮の近い首都で暮らす正規軍と呼ばれる兵士たちは、薄汚いところを好まない。金のある貴族の依頼は忠実に遂行するが、下町と呼ばれる首都から離れた平民の前には姿も見せたこともない。アイセン留置所は下町の中で最も南端に位置し、首都から遠い。普段来客など来ることのないこのような場所に、何ゆえ彼らが訪れてくるのか。周りの人も、正規軍の存在に気づいたようで、ざつき始めている。

「あいつら、一体何の用だ」

サジの語彙には明らかに怒気が含まれていた。それもそのはず、ここにいる六割の人間は正規軍の工作によって犯人に仕立て上げられた者達だ。アレンはサジの過去を聞いたことはないが、ひよっとしたら彼も正規軍に濡れ衣を着せられた一人なのかもしれない。

場の空気が険悪に包まれた時、誰かを探すように首を回していた正規軍の一人がアレンと目が合った。そして、あろうことか鎧の擦れる音を響かせながらこちらへ歩いてきた。

「貴様、アレンで間違いないな？」

「・・・そうですか・・・なにか」

持っていた写真とアレンとを照らし合わせるように見比べた後、虫でも見るような睨みで冷たく訪ねてきた。自然とこちらも会話が丁寧ではなくなってしまう。

「用がある。来い」

「ちょっとあんたら！アレンに一体なにをするつもりよ」

後ろから、人波をかき分けてニーナが叫んでくる。今にも飛びかかりそうな勢いだ。やばい。反射的にアレンはそう感じた。

正規軍は自分より下であると認識している人間にたてをつかれることを非常に嫌う。そして彼らには格下の人間をこらしめるだけの権力を持ち合わせている。機嫌を害って留置所ではなく、下手したら監獄行きを命じる。なんてことになったら大変だ。

ピクッと眼前の男の血管が痙攣したのが見えた。気のせいではない

だろう。完全に切れている。

アレンはニーナを庇うように声を出した。

「俺に用があるのでしょう？時間がありません。早くしてください」
時間なんて何もすることのない自分達にとって有り余るほどあるのだが、如何せん、咄嗟に機転が利かなく思い付いた言葉を並べてしまった。

しかし、予想外。上手くいったようで、男は血走った目をアレンに向けると、鼻を鳴らして背を向けた。そのまま帰ってくれるのかと思いたいところだが、着いて来いという意味なのだろう。アレンは重い鉛のような足を引きずるように彼の足跡を辿った。

「アレンっ！」

ニーナの呼び止める声、振り向けば今にも泣きそうな顔でこちらを見ていた。心配させないようにアレンは微笑む。

「今日は『特等席』ありがとう。また、昼食時に会おう」

それだけを言って背を向けた。

正規軍に呼び出されるぐらいだ。悪い予感しかない。もうアレンの姿を見ることは無いだろうな。なんて思う仲間もこの中に大半はいるはずだ。だが、こんなところでアレンは命を落とすわけにはいかなかった。

——大丈夫だ。

しかし、食堂広場から出た暗い廊下と前を歩く彼らの背を見ると、
どう自分に言い聞かせても不安が拭えることは無かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4561v/>

Shine days

2011年10月9日09時24分発行